

## 第四章 高校生のころ

決して印象のよくない受験勉強であったが：

昭和三十四年四月、兵庫県立社高等学校に入学した。学区制のため、滝野中学校からの選択肢は、普通科であれば社高校のみ、その他は家庭科、商業科、工業高校に入学した。毎年、高校入学希望者はほとんど志望校に入学できた。

当時、社高校は、旧制社高等女学校から新制高校になった地域の伝統校で、校舎は旧社町の神戸地方裁判所社支部の近くにあった。

入学したときは、旧女学校の古い校舎で勉強したが、二年生のときに、郊外の嬉野台地の新築校舎に移転した。新校舎は、鉄筋コンクリート造二階建て二棟であったが、机・椅子等の備品は、古いものをそのまま使ったので生徒が手分けして運んだ。

昭和三十年代初め頃から大学進学熱が起こり、入学早々から受験勉強に明け暮れた。クラスも進学組、就職組に分かれていた。進学組は、受験に必要な英語、数学、国語、社会、理科の

主要五教科を重点的に勉強した。

木谷龍夫先生の英語、末沢敏文先生の数学、田中義昭先生の国語、中西俊明先生の日本史が印象に残っている。中西先生の日本史は、三年間も授業があったのに明治維新のところで終わった。

夏休みには、学校で補習があり、O先生は、綿シャツ・短パンで授業をされていた。学年主任のT先生から、模試の成績が悪いと怒鳴られたこともある。先生も生徒も大学受験に必死であった。

初めは、理系学部の受験を目指していたが、三年生になって文系に変更した。当時、東播模試と言って、姫路く加古川く西脇までの公立高校で広域模試が行われており、この成績で受験校を決めていた。模試の成績はいつも一番から最後まで掲示されていた。

田舎に受験予備校はなく、受験指導は、今では考えられないが、現役の高校教師の自宅で、日曜日や夜間に受けた。M先生に英語、O先生に数学を習った。M先生は、大阪外国語大学の卒業生でオーソドックスな英語であった。英語はもともと好きだったこともあり、特に英作文ではよい成績をもらった。後に海外旅行をした際、聞き取りはできなくても、メモ用紙を使つての筆談は結構うまくできた。O先生は東京理科大学の卒業生で、数学の問題はヒントを述べた後「計算は、しもじもで」と一向に説明しない。これで随分考える力と実力がついた。

クラブ活動は、「外語班」に入った。秀才グループは「新聞班」に入った。どちらのクラブも大学進学率は高かった。

高校時代は、自分でもよく勉強したと思う。寒い冬の日には、部屋にストーブもなく、荒壁のままの自宅の二階で、天井から父の将校マントをつりさげてテント状にして寒さをしのいだ。それでも顔の前を風が吹いていた。

決して印象のよくない受験勉強であったが、その後長く付き合っている友人には受験仲間が多い。高校時代は、基礎学力の練成と仕上げ期で、この時代にしっかりと勉強したことが、その後の知的好奇心や学習意欲の土台となり教養の基本になった。

高校三年になれば進路を決めなければならぬ。当時、校舎の近くにあった「黒石会計事務所」の看板を見て、どんな仕事をしているのか関心を持った。税理士という資格で、会社や個人の決算、申告の仕事をしているらしい。

自由業で暮らしていければよいな。自分の事務所を持って、お客さまに来ていただける仕事がしたいなど思った。後に二十八歳になって、最初に税理士事務所開業のご挨拶に伺ったのは黒石一三先生の事務所であった。

大学受験は、国公立の商学部なら大阪市立大学、経営学部なら神戸大学、少しやさしい県立神戸商科大学、私立なら関西学院大学が選択肢になった。最後は、模試の成績で神戸商大と、

関西学院大学を受験し、まさかの神戸商大を落ち、合格したのは関西学院大学商学部であった。高校生時代の社会情勢の変化は、比較的正確に思い出す。入学した昭和三十四年は、皇太子明仁親王と正田美智子さんが結婚され、ご成婚パレードが華やかに行われた。景気は過去最長の岩戸景気で沸いていた。その年は安保阻止闘争華やかになりし年で、国会包囲デモの中、安保条約が自然成立、岸首相が引退表明、その後総辞職して池田内閣ができた。